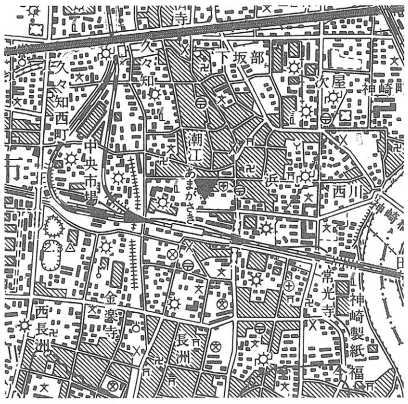
兵庫・猪名庄（いなのしょう）遺跡

1　所在地　兵庫県尼崎市潮江字東大寺
2　調査期間　第三一次調査　一九九七年（平9）一月～六月
3　発掘機関　尼崎市教育委員会
4　調査担当者　岡山真知子・禰宜田佳男・大久保浩二・矢口裕之・氏平昭則・山上真子・渡辺　昇
5　遺跡の種類　集落跡（荘園遺跡）
6　遺跡の年代　古墳時代～江戸時代
7　遺跡及び木簡出土遺構の概要



（大阪西北部）

猪名庄遺跡は、猪名川下流域の低湿地に広がる初期荘園遺跡である。猪名庄は、東大寺領の初期荘園として絵図も伝わり、荘園研究史上著名な荘園であるが、今までその遺跡の実態は不明であった。

今回の調査はＪＲ尼崎駅北再開発に伴う発掘調査である。調査面積が五三〇〇㎡と広かったことも幸いして、ある程度遺跡の実態が明らかになってきた。

調査地は市街地化しており、旧地形は明瞭ではないが、多くの洪水を被り複雑な地形を呈していた。標高は一～二ｍを測る。検出した遺構の年代は、古墳時代から江戸時代にわたる。木簡は鎌倉時代の井戸ＳＥ〇七・〇八から一点ずつ出土した。

ＳＥ〇七は、井筒に曲物を利用した井戸で、井側は確認されていない。木簡は蘇民将来札で、曲物上部の埋土から少量の須恵器・瓦器とともに出土した。土器の年代から、ＳＥ〇七の廃絶時期は一二世紀末頃と考えられる。

ＳＥ〇八は、井戸構造が残存しておらず、掘形だけが素掘りの状態で確認されている。木簡は呪符の可能性がある。共伴した須恵器・土師器・瓦器から、ＳＥ〇七と同時期の一二世期末頃のものと考えられる。

今回の調査では一五基の井戸を検出しているが、大半の井戸はＳＥ〇七・〇八とほぼ同じ時期のもので、それに伴う掘立柱建物も多数存在することから、当遺跡の遺構のピークになる時期と考えられる。ただ、奈良時代から平安時代前期の猪名庄と直接つながるかどうかは不明である。次に述べる初期荘園の遺構に比較すると、通有の集落の様相を呈する。

奈良時代から平安時代の初期荘園の遺構としては、倉庫などの大型建物を検出した。この時代の木簡は出土しなかったものの、墨書

土器が数点出土しており、特にSE一六から一括出土した土器群が注目される。井戸枠内に埋置されていた六点の土師器皿の一点に「西庄」の墨書がみられ、他の三点にも記号と思われる墨書が記されていた。皿のタイプは複数あり、平城京と同じタイプのものと、地元産と思われるタイプが混在している。この他、包含層出土の墨書土器に、「□」[万カ]「□私□」がある。

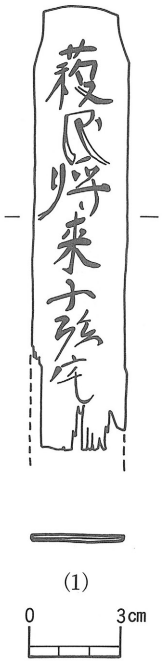
8　木簡の釈文・内容

(1)　「蘇民将来子孫宅」　(144)×31×3　019

下部は欠損している。上端は両方から削り出し、わずかに圭頭状にしようとした意図が認められるが、丁寧ではない。墨痕の遺存状況はまちまちであるが、ほぼ全文字が判読できる。下端に墨痕が見られないことから、下に続く文字はないものと思われる。裏面にも文字は認められない。

(2)　（符籙ヵ）　(68)×(14)×3　081

文字は全く確認できないが、符籙の可能性のある三本の線がかすかに認められる。呪符木簡の可能性があるが、断定はできない。上下左右とも割れた断片である。

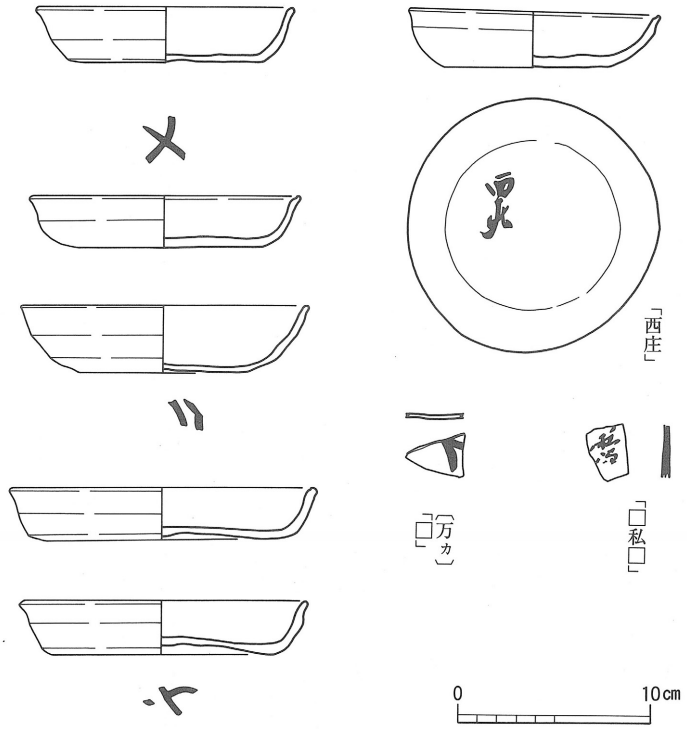


9　関係文献

兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所『平成八年度　年報』（一九九七年）

同『平成九年度　年報』（一九九八年）

（渡辺　昇〈兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所〉）



SE16・包含層出土墨書土器